

中国人の日本語作文コンクール

／日本僑報社など主催
／アジア調査会後援

中国に在住する中国人青少年を対象とした「第11回中国人の日本語作文コンクール」（日本僑報社・日中交流研究所主催／アジア調査会など後援）の受賞作をアジア時報3月号に続き、掲載します。今回紹介するのは一等賞3作品です。前回は最優秀賞と一等賞2作品の計3作品を掲載しました。

テーマは「日中青年交流について」「なんでそうなるの？」「わたしの先生はすごい」の3つです。日本に留学経験のない学生を対象としたコンクールで、今回は中国全土から過去最多の4749作品の応募作が寄せられ、審査にはアジア調査会も参加しました。受賞作は「なんでそうなるの？」中国の若者は日本のココが理解できない」のタイトルで日本僑報社から出版されています。内容、日本語ともに質の高い作品が多く、中国の学生たちの本音が詰まつた作文集は、改めて草の根レベルでの日中関係の重要な性について考えさせてくれます。是非、ご一読ください。

（編集部）



一等賞
テーマ：「わたしの先生はすごい」

嶺南師範学院
外国语学院日本語学科 張戈裕

私の曾祖父は日中戦争で亡くなつた。多くの中国の家庭と同じように、日本に対する恨みは、家訓の如く血にまじり、肉に入り、骨髓に徹している。私も生まれてから何の疑いもなく、この恨みを受け継いできた。

しかし、運命は不可抗力のものである。大学入試の点数が足りないので、志望した学部に入れなくて、日本語科に入ることになつた。この結果は家族の人々にとって爆弾のようだつた。父は浪人になつて来年また頑張ろうと言つた、母は浪人の苦労を考慮してくれた。議論の後、とりあえず

入学して、チャンスがあればほかの学部に転入せよということになつた。

こんな中途半端な気持ちで、私は大学に入った。日本に対する抵抗があつたので、日本語の勉強はうまく行かず、成績が悪かつた。日常生活においては、親から授業料を提供してもらつたが、生活費は自分でアルバイトして負担しないといけない。毎日、あちこち走り回り、落ち着く暇もなかつた。他学部への転入も簡単ではない。心配事が山ほどあつて、退学さえ考えた。

ある日、学校付近のカレー屋でバイトをしていた。休日のため、お客さんが多くて、朝から夕方まで働き通しだつた。貧血症に寝不足のせいか、夕方の頃、急に気を失つた。折りよく店で食事していた矢野先生に見られた。矢野先生は日本語科の先生だが、授業以外の時間で会話することがなかつた。しかし、数日後、矢野先生はいきなり「よかつたら私の中国語の先生になつてくれませんか」と家庭教師の話をしてくれた。断るわけにはいかないので、一応引き受けた。しかし先生の中国語のレベルは尋常ではなかつた。普通に中国語で会話ができていた。先生のおかげで、私は少しずつ日本という国を理解できるようになつた。日本は行つたとして先生からいろいろ教えてもらつて、却つて私のほうがいろいろ勉強になつた。先生のおかげで、私は少しずつ日本という国を理解できるようになつた。日本は行つた

ことのない世界だが、なぜか心が惹きつけられる場所のような気がしてきた。日本語に対する興味も次第に湧いてきた。

先生がバイトの話をしてくれた心遣いは、心の底から感謝している。先生は東京大学の出身で、教え方もすばらしく、多くの学生に敬愛されていた。しかし、私にとっては、それは一番重要なことではない。先生の好意は、凍り付いた学生の心を溶かす力があつた。先生の存在が光のように、私の暗い道を照らしてくれた。しかし、私はまだ日本が好きだということを認める勇気がない。日本が好きだというのは道德や家訓に反することだった。特に、私のような家庭では。

ある日、矢野先生の手に湿疹ができたので、私たちは先生と一緒に病院に行つた。矢野先生が日本人だと分かると、担当の優しいお医者さんが一瞬にして冷たい表情に変わつた。そのお医者さんは、矢野先生は中国語が分からないと思つたせいか、私たちに向かつて思うがままに日本と日本人を批判し始めた。興奮して、かなりきつい言葉も口に出してしまつた。矢野先生にはすべて理解できていた。しかし、ずっと黙つていて何も言わなかつた。でも、先生の目に失望と悲しみが映つていた。突然、私は泣きたくなつた。矢野先生は一人で国を離れて、真心をもつて中国の学生を教えに来た。確かに過去に戦争があつた。中国の人々が多

この被害を受けた。しかし矢野先生には何の悪い所もない。戦争があつたからすべての日本人が悪いという思考回路がおかしい。矢野先生よりそのお医者さんのほうが恨めしかつた。しかし同時に、以前の私もこのお医者さんと同じだつたことに気付いた。

冬休みになつて実家に帰った。両親から他学部への転入の話をされたので、矢野先生のことを話した。父と母は何も言わなかつた。反対の声は二度と出てこなかつた。

私の先生はすごい。彼一人の力で私の家の歴史を変えたのだ。日本を憎む歴史を。

(指導教官…李国寧)



一等賞
テーマ…なんでそうなるの?

何でそうなるの? —中国の若者は日本の ここが理解できない

江西農業大学南昌商学院 翁曉曉

最近、私とルームメート、そして日本人先生の三人の間でちよつとした賭けが流行つている。大体は日本語コナーレ来る人数が奇数か偶数かや、ある単語が電子辞書に載つているかいなかなどである。私とルームメートは一

だよ」と言い食べ続けている。私たちも頑張つてみたがどうしてもお腹に入らず、お腹が破裂しては元も子もないと思ひ食べ続けるのを諦めた。しかし、先生はまた食べ続ける。「明らかにお腹いっぱいの様子なのに、どうしてやめないの」と思つばかりだつた。先生はやつと箸を下ろした。これで私たちは帰れるのかと思ったが、先生は少し休んでからまた食べ始めた。このように、食べては休み、休んでは食べと繰り返し、結局二時間半でなんとか完食した。最後、先生は「ご馳走様でした」と言って、席を立つた。ルームメートと私は思わず顔を見合させて、やつぱり不思議だと感じた。

それから一ヶ月後、久しぶりに日本に留学している先輩と連絡した。彼は日本で体験したことをいろいろ教えてくれた。彼が居酒屋でのアルバイトについて話してくれた時、「日本では残飯が少ないので、お皿を洗うのは本当に楽だよ」と言つた。彼は日本に行く前に学校の食堂で机の上の食器の後片付けのアルバイトをしたことがあるのだが、日本と比べると、残飯が多く、汚くて洗いにくくと教えてくれた時、ふと食べ放題の鍋料理店で一生懸命食べていた先生の姿が思い浮かんだ。先生はどうしても食べ物を残さないといつも必死になつて食べた行動は、食べ物を大切にしているからなのではないかと思えてならない。確かに農民たちは苦労して、私たちに食物を提供してくれている。そし



一等賞

私は折り鶴になりたい —平和な世界のために

常州大学 陳靜璐

あれは私が小学校の時でした。

「なによ。こんなバカな話があつてたまるものですか!」いつもやさしい担任の先生が、顔を真つ赤にして怒鳴つたのです。初めて怒つた先生の顔を眺めて、小学生だった私はショックを受けました。先生の言葉で教室の空気は一瞬

でも先生に賭けで勝てずに、いつも悔しい思いをしていました。そこで運を天に任せ、一ヶ月後の日曜日の天気について賭けることにした。私たちはその日の天気を雨に、先生は晴れに賭けた。それ以外の天気は無効ということにした。

一ヶ月が経つた。幸運の女神は私たちに微笑んでくれたのか、前日の快晴とうつてかわつて大雨が降つた。賭けのご褒美はもともとリンゴ1つだつたが、初めて勝つたので先生に無理を言って、食べ放題の鍋料理をご馳走してもらうこととした。どうせ先生がお金払つてくれるのだから、私たち二人は思い切り食べてやろうと興奮していた。鍋の具材を皿に載せられるだけ載せた。しばらくも経たないうちに私たちのテーブルは野菜や肉を満載したお皿でいっぱいになつた。先生は目を丸くしていた。食い意地が張つている私たちは具材を次から次へと鍋へ放り込んでいると、先生は私たちを見ながら手を胸の前で合わせ「いただきます」を敬虔に言つた。その様はドラマで見たことがあるだけで、実際にまのあたりにしたのは始めてだつた。私たち二人は「へえ、変なの」と心の中で不思議に思つただけで搔き込むのに忙しくて、その気持ちはすぐ忘れた。

三十分も過ぎると私たちはお腹がいっぱいになつた。でも先生はまだ食べ続けていた。「先生はお腹が空いていたのか。痩せているのに結構食べるね」と私たち二人は先生に分からぬよう中国語で話した。先生は「残したら駄目になります」と言い、完食した後「ご馳走様でした」と言ふ。この言葉の意味は私はよく分からぬが、この言葉もきっと食べ物への感謝と敬意を表しているものなのだろう。

それから、私たちの食べ物に対する考え方や食事のスタイルが大きく変わつたのは言うまでもない。

(指導教官…森本卓也)

にして冷え込みました。

「皆、知っているの？折り鶴は、日本から伝わったものよ。大虐殺を悼むのに、なんでわざわざ日本の折り鶴で悼むのよ！」と先生は言いました。私たちの故郷南京で起きた大虐殺の慰靈祭に、地元の小中学校では手作りの折り鶴を作り、犠牲になつた人々に供えることになつていたのです。私たちの学校でも、折り鶴をたくさん作りました。用意された紙は数えきれないほどたくさんで、私達は時間を見つけては折り続けました。たくさんの先生たちも手伝ってくれました。私たちの担任の先生も手伝おうとしてくれたその時の出来事でした。

あの時、私は、折り鶴が日本から伝わったものだと初めて知りました。担任の先生は理性のない反日派では決してありません。しかし、彼女ですら、このような考え方をしました。

一枚一枚きれいな紙で丁寧に作つた折り鶴に、人々は世界平和への純粹な願望を込めます。でも、折り鶴の起源が日本という理由だけで、この一羽の折鶴は戦争の罪の象徴と考える人もいるのです。多くの中国人は「第二次世界大戦で、中国国民党は日本人によつて多大な犠牲を払つた」と強く意識しています。

大学に進学するときもこのことを思い出しました。日本語科を選ぶのに、ためらいの気持ちがあつたのも事実です。

ちと心のこもつた温かい交流を体験しました。交流した人々からは、純粹な思いやりの気持ちを感じました。やはり、実際の印象は想像したもの以上だつたのです。

私達若者は、直接的な交流をもつと経験し、お互いの真の姿を見つめるべきです。私は南京で生まれ育ちましたが、両国の友好を実現できるのは、未来を握っている若者、即ち私たちなのです。歴史を忘れ捨て去るのではなくそのすべてを受け入れ、交流を通して、お互いの立場や思いを理解することが肝心です。

折り鶴は、作り手から注がれる願いや思いが生命力を与え、翼を開かせ優美な姿を表すのです。小さな羽を精いっぱい広げ、世界の平和の象徴として羽ばたく折鶴のように、私はなりたいと思います。今、私は担任の先生に胸をはつてこのことを話したいです。きっと必ず先生は理解してくれる信じています。

(指導教官：陳林俊、古田島和美)



2014年(平成26年)4月1日発行(毎月1回1日発行) 運営会社
ISSN 0288-0277

アジア時報

2016.4

The Asian Affairs Research Council

米大統領選特集
2016年米予備選で何が起きているのか
二大政党的分析と展望 西川 貢

アジア調査会講演会
自公連立政権における公明党の役割
山口那津男

講演・討論会
熾烈さを増す米国での日中韓ロビー合戦
ロー・ダニエル

AARC 一般社団法人 アジア調査会 (毎日新聞社内)

しかし、私が生まれて育つてくる間に、私の身近にあつた国は、なんと日本なのです。知らず知らずのうちに一番詳しい外国は、日本だと気づいたのです。教科書や新聞に載っている日本、Jポップやドラマから知る日本、どれが真実の日本なのかと複雑な気持ちでした。日本のアニメの底辺にある人類愛や平和への思いもわかりました。だからこそ、私は真実を見つめ日本を知りたいと思つたのです。

しかし、年々日に日に中日関係は冷え込んでいきました。2014年9月、日本の民間団体、言論NPOと中国の英字新聞チャイナ・デイリーが行つた調査結果が中国でも報道された時、私も級友もがつかりしたのです。なんと、日本側が中国に對してマイナスイメージを持っている人の割合が9割以上を占めました。一方、中国側も日本に對してマイナスイメージを持つている人が9割弱だったのです。

私は、お互いの相手の悪い点ばかりを取り上げているばかりの今の状態では友好関係は築くことができない、そう思います。日本に留学している中国人は現在約八万人で日本の全留学生の6割を占めます。また、日本への観光旅行者数は年々増えています。日本に對して好意を持つている中国人がいることを日本人に知つてほしいと強く思います。また、私達も眞の日本、日本人を知る必要があるのであります。

今学期、私は、日本の大学生や常州に住む日本人女性た